



COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙

2013 秋

VOL. 5

中越大震災から9年 10年のその先に見据えるものは



—美しい棚池の風景(山古志)—

contents

特集① P2-3

「やまこし復興交流館オープン」

【シリーズ】P 6「人と人」石曾根 徹・坂本 慎治

【COSSS リレーエッセイ】「震災の記憶を残すということ」やまこし復興交流館 筑波 匡介

【連載】コラム・視点防災 【その他】インフォメーション、施設のご案内、会員募集

特集② P4-5

「中越大震災 10 周年～その先にあるものは」

中越メモリアル回廊グランドオープン
新潟モデルの発信

特集①

「特別インタビュー やまこし復興交流館オープン」

平成25年10月23日、中越大震災から9年を迎えたこの日に、中越メモリアル回廊の新たな拠点の1つとして「やまこし復興交流館 おらたる」がオープンした。今回は、その運営主体であるNPO法人中越防災フロンティア理事長の田中仁氏にオープンを迎えての心境や今後の方針について、話を伺った

Q. オープンを迎えての心境は

「やまこし復興交流館 おらたる」が、発災から九年目となったけれどもオープンできたことが単純に嬉しい。これまで、いろいろな方々に助けていただきながら、中山間地で少子高齢化、過疎化が急激に進むなかで、様々なことを考えながら復興に向けて歩んできた九年間だった。交流館ができたことによって、地域の持続可能性をどう獲得していくか、域内・域外の人たちとどうコミュニケーションをとっていくか、そういう場を与えられたという意味も含めて大変嬉しい。

Q. 震災から九年

——に至るまでの

気持ちの移り変わりは

中越大震災に見舞われ、すぐに長岡市内の高校の体育館に避難してきて、その後三年間、山古志を離れて仮設住宅で生活をしてきた。そこでつくづく感じたのは住民の「帰りたいんだ」という気持ちだ。豪雪地ではあるけれども自分たちのふるさとである山古志に帰るんだ、という気持ちが地域住民のなかに非常に大きくあった。インフラがある程度復旧した段階で、仮設住宅から山古志の自宅に四、五十分かけてでも、田畑や錦鯉の池を修復するなどしてきた。なぜそこまでする

のかと思われるかもしれないが、地域住民にとっては、生きるための大切な畑であり、田んぼだった。

仮設住宅に在る間に、山古志に小中学校ができて、子供たちも含めて帰ることができることになり、日常の生活を取り戻しつつ、同時に多くの人々に助けてもらったことに対する恩返しをしたいという気持ちがあった。この地域をこれからどう再生していくか、あの時「山古志に帰ろう」と思った気持ちをどう現実のものとしていくか、自分たちの生業に一生懸命になることによって生活を取り戻していくと。しかも、そのプロセスには自分たちだけではなく、多くの人に助けていただいたという感謝の気持ちが皆さんにあると思う。だから本当に尊いふるさとだという気持ちは皆さんお持ちだと感じている。

Q. 山古志に帰る

——ということの意味は

離れてみると、ますます山古志に対する愛着が増していった。しかし、「ここに家を作っては駄目ですよ」と、どうしても物理的に帰れない人がいる。畑はまだ山古志にあって、耕作をやりに来る。つまり、住んでいる場所は町場だけれど、自分の生活のフィールドとしてのふるさととは依然として残っているし、そこが拠り所だという方はたくさんいる。そういう

う人たちも含めてこれからこの地域をどうしていくか、真摯に取り組んでいかなくてはいけない。世代や人の価値観によって、その地域ではないフィールドで頑張っていたかどうかというのも大切。でもどこかに自分のふるさとが残っているということが大切だと思う。現実はずごく厳しいところもある。ただ、どの地域にも生活する上で不都合な部分はあって、なんとか自分たちでできることは一生懸命やっついこうじゃないかということも人と人とのつながりだと考えている。山古志は結構そういうことを受け入れてくれる地域なんじゃないかと思っている。

Q. 中越大震災が

住民に何を気付かせたのか

山古志のよさを再認識したという所は大きい。地震がなければずっと山古志にいて、生涯を終えるという人は当たり前だった。中越大震災の発災によって、住民は無言を言わず山古志を二、三年離れることになった。その体験をしたからこそ、それぞれの年代の人が自分にとって山古志が大切な場所だったんだということを確認したのかもしれない。もう一つ、山古志出身で都市部に出た人が、自分のふるさとが復活・再生したということに対してすごく喜んでる。今でも交流はあるし、出ていった人たちのなかに

にも、何か自分にできることはないだろうかと考え、実行している人は多い。

Q. 「やまこし復興交流館」には何があるのか

復興交流館の一階は交流の場だが、地域内での交流もあるし、地域外の人たちとの交流もある。そこでは地域の人たちが、自分の地域を見つめた時、今まで何気なく食べていた地元野菜を実に美味しい野菜なんだと気付く。これをなんとか外にアピールできないかと考えている。例えば、神楽南蛮（かぐらなんばん）をベースにした山古志カレーやお菓子をつくってみたり、自分たちが当たり前に思っていたことが、違う目線で見ると、すごく素敵なことなんだよということに気付く場であつてもいい。発信する場であつたり、気付く場であつたり、挑戦する場であつたり。山古志の人がそこで活動し始めることで、住む人の一つのスイッチになればいいかなと思っている。二階は震災から今に至るまでの記録の場。それはきちんと残さなければいけない。もうすでに、中越大震災や仮設住宅生活を体験しない世代の子がいて、記憶はどんどん薄らいでいく。この故郷でどういうことがあつたのかを子供たちだけでなく、誰にでも伝えられるようにすることが大事。自分たちの記憶や経験をまとめて、これから起こりうる災害の被災

地に伝えたい。直近で言えば東日本大震災で被災された方が、これからふるさとやコミュニティをどうしていったらいいのだろうと多くの方々が悩んでおられる。被災の大きさや環境の違いはあっても、何か一つでも参考になり、力になればらと思っているし、そういう場所であり続けたいと思う。



Q. 「おらたろ」から、未来に伝えたいことは

九年目で交流館ができて、一つの区切りという意識はあるが、中山間地の抱える問題はこれからも続いてゆく。今はその途上であり、一つの過程でしかない。次の世代に伝えるものは何だろうと考えると難しいが、自分たちがどうやって今に至ってきているか、これを残して次の世代に引き継いで、彼らが自分たちなりにアレンジしていつてくれたらいいと思っている。模索しているところだが、持続可能な地域づくりの仕組みといったかたちで残すことができればと考えている。

田中 仁

山古志虫亀集落在住。NPO 法人中越防災フロンティアの理事長として、地震後、公共交通がなくなった山古志地域でコミュニティバスの運営にあたる。震災を機に始まった中山間地域の様々な地域づくりの取り組みについて、また、自身が所属する長岡市消防団山古志方面隊長として、震災時の様子や、今後の課題についての語り部活動も行っている。





中越メモリアル回廊とは

メモリアル回廊についていま一度整理する。「中越メモリアル回廊」とは、中越大震災の被災地に四つのメモリアル施設と三つのメモリアルパークを整備し、中越大震災をまるごとアーカイブしようとする取組みである。各メモリアル施設を巡ることで被災の爪痕や復興の歩みを学び、体感することができる。それだけではなく、中山間地の持続可能性を獲得するために、被災地住民が地域経営の拠点として活用することも目的として整備されている。やまこし復興交流館のオープンに先駆けて、平成二十三年度十月二十三日に、長岡震災アーカイブセンターきおくみらい、小千谷震災ミュージアムそなえ館、川口きずな館、震災メモリアルパーク、妙見メモリアルパーク、木籠メモリアルパークがオープンしているが、この二年間に国内外からの視察者、来館者十万人を達成した。

中越メモリアル 回廊各拠点の特徴

メモリアル各施設は、オープンから二年の間、それぞれに個性を持って運営を行ってきた。メモリアル回廊の中核となる「きおくみらい」では、中越大震災を、航空写真、iPadを活用して振り返るこ

とができる。また、回廊全体の視察コーディネートを行っており、語り部の紹介や、バス同行ガイド、周辺観光案内など、

視察団体のニーズに合わせた行程の提供をしている。特に、教育機関・東日本大震災被災地からの視察団体のコーディネートでは、地域や他機関と連携しての視察研修となり、好評をいただいている。

「防災」に主眼を置いた「そなえ館」では、地震発生直後から復興までの歩みを三時間、三日、三ヶ月、三年と時間軸を設定しての実物展示や、地震体験機器によって当時の状況を体験できる施設となっている。通常の展示案内に加えて、オリジナルの中越地震紙芝居や、防災クロスロードゲーム、避難所運営ゲームなどのコンテンツも取りそろえ、より防災を意識した研修の受け入れに特化している。

「きずな館」では、旧川口町の活動拠点として機能するように、被災地住民とともにフィールドを広げてきた。カフェやフリーマーケット、サロンコンサートや体験教室など、被災地住民の交流活動のメインステージとして、地域の要望に応えられるよう高い柔軟性を持った施設を目指し、今では、年間一万二千人以上の利用者に対応している。

グラントオープンを迎えて

そしてこの秋、平成二十五年十月二十三日に「やまこし復興交流館 おたらる」がオープンしたことにより、四施設三パークからなる中越メモリアル回廊はグラントオープンした。さらに各拠点が個性を発揮しながら、中越地域全体での情報発信を強めていく。グラントオープンから一年後の平成二十六年度は、中越大震災から十年、新潟地震から五十年、阪神・淡路大震災から二十年を迎えるメモリアルイヤーである。中越メモリアル回廊はこの歴史的な年に、中越一体となって全国、そして未来へとメッセージを発信していきたい。さらにその先の十年、二十年と、地域と共に中越の今を伝え、これからのを考えていく拠点であり続けたい。



特集②

シリーズ中越大震災十周年～その先にあるものは～ 中越メモリアル回廊グランドオープン / 新潟モデルの発信に向けて



復興に立ち向かう人。
支援に立ち上がる人。
震災からの復興をきっかけに、
いくつもの新たな絆が生まれた。
人と人、笑顔と笑顔がつながっていく。

新潟モデルの発信に向けて

去る十月二十二日（火）、長岡震災アーカイブセンターきおくみらいにおいて「平成二十五年 復興評価・支援アドバイザリー会議」（以下：アドバイザリー会議という）が開催された。この「復興評価・支援アドバイザリー会議」は、中越大震災被災地の復興プロセスとその成果の客観的な分析・評価を通じ、被災地である中山間地の持続的可能性の獲得を目的に平成二十二年から開催している。

今年度は翌年（平成二十六年）の中越大震災十周年を視野に、復興プロセス研究会（中越地域の若手研究者が中越の復興プロセスを研究する会：座長澤田雅浩氏）が実施した「中越地震の復興に関するアンケート調査」の報告とそれに対する意見交換が行われた。議論のキーワードとなったのは、中越地域の特徴である「中山間地」「過疎・高齢化」などの『地方が抱える課題』と、『住民主体』、『復興感』などの『住民主体の復興』であった。また、中越地震の復興を後押しした「二つのシナリオ」、「復興基金」もとり上げられた。

中山間地域は元々災害が多く発生する地域である。特に、中越大震災の被災地である中山間地は日本でも有数の地すべり地帯であり、住民が主体的に共助活動を行わなければ「暮らし」が成り立たない地域でも

ある。

この「主体的な住民」の精神の元、ボランティアや専門家、中間支援組織などの、多くの外部人材と連携しながら復興してきた経緯や、「復興感」と時間軸の関係性について議論がなされた。

今後は、復興プロセス研究会と連携しながら「復興基金の活用状況」、「外部支援者の有無とその内容」、「復興感」、「災害への備え」等をキーワードにさらなる調査を進め、東日本大震災の被災地や新潟県の地域振興に寄与できるような「新潟モデル」の発信を目指す。

（復興デザインセンター 日野正基）



シリーズ

人と人

市との打ち合わせの中で、地域おこし協力隊の話題となり、真人地区にもぜひ入れたいと思いました。そこで地域の団体に話したところ、快諾を得られました。

しかし、坂本君の写真を見ての第一印象はちょっと難しそうなおやつ。真人に馴染めるか、地域おこし協力隊としてやっていけるのか、正直不安でした。ただ、会って見るとそんな心配もすぐに消え「誰か分からないけど、玄関に天ぷらが置いてありました」なんて話を聞くと「地域に受け入れられたんだなー」って思います。

今後、彼には自由に活動してもらいたいですね。彼一人が真人に移住したところでそんな大きな変化は現れないと思います。しかし、地域の人たちが少しでも興味を持って、刺激になれば嬉しいですね。彼に与えられた時間は三年。冬を考えると、実質あと二年です。その中でどう活動するか、その後の人生設計をどうするか考えてもらいたい。まずは初めての冬を逃げずに楽しんでもらいたいですね。

「地域への想いが育む
あらたなつながり」

石曾根 徹

小千谷市地域復興支援員
真人地区担当

農協職員やイベント業などの職を経て、平成十九年に小千谷市地域復興支援員に。現在は真人地区を担当し、地域おこしに携わる団体などの活動支援を行っている。

坂本 慎治

小千谷市真人地区
地域おこし協力隊

東京や中国でIT関係の職に就き、特にアプリの開発事業などに携わる。中国から帰国後、真人地区の地域おこし協力隊となり、平成二十五年六月三十日に真人入。

海外から帰り、地元の商店街がシャッター通りになっていたことにショックを受けました。地域おこしに興味を持ったのはその時です。そんな中、地域おこし協力隊の存在を知りました。

真人地区は私の育った所と環境が似ていたため、抵抗はありませんでした。ただ、最初の顔合わせが飲み会だったのは衝撃的でした。私も嫌いではないので、すぐ受け入れられました。

今後は都会に住んでいる人たちに、田舎で暮らすきっかけを作りたいですね。キーワードは「半農半X」。農業以外に無理せずほかの事をして生活する。兼業農家とは少し違う考え方です。そのための足掛りとして、来年から田んぼを借り、ここに都会の知人を呼んで、米を作ろうかと考えています。ここは新幹線なら二時間で東京から来ることが出来ますから。

それと都会では出来ない体験としてドラム缶風呂を始めました。近所の人興味を持ってきているみたいです。都会の仲間にも体験してほしいですね。

「震災の記憶を残すということ」

やまこし復興交流館 筑波 匡介

私が公益社団法人中越防災安全推進機構に参加させていただいて随分と時間が立ちました。もともと、文化財の活用に関心があり、歴史的文化財に関わってみたいと考えていました。特に、歴史的なまちなみの保存活用を仕事にしたいと全国津々浦々を旅しているところ（仕事もせず暇をしていると思われるのでしようか）、平井邦彦長岡造形大学名誉教授より声をかけられ、中越防災安全推進機構の職員として「震災の記憶を残す」ことが、私の任務として言い渡されました。この任務は、十月二十三日に「やまこし復興交流館」を開館することで「中越メモリアル回廊」（四施設・三公園）がグランドオープンとなり、ひとつの区切りが過ぎました。この機会に少しだけ振り返っておこうと思います。

最初に取り組んだのは、仮設住宅の保存でした。百年をかけて作られてきたまちなみを保存することを目標としていた私にとって、築二年の仮設住宅を保存することは、正直とまどいました。超現代史に取り組むことになったのです。

その後すぐにやらなければいけないと感じたのは、資料収集の専門家（アーキビスト）との連携です。私は資料収集のプロではありませんでした。一人で「震災の記憶を残す」には何をすることも無理がありました。そうなれば、誰かに助けをもらわなければいけません。



おらたる 2階展示「希望の鐘」

運が良いことに、長岡には、県立歴史博物館や市立科学博物館があり、保存や活用のプロがいました。また、長岡市史編纂室の流れをくむ長岡市立中央図書館文書資料室があり、小千谷市立図書館にも資料収集のプロがいました。県立図書館司書の方々からの仲立ちもあり、多くの人たちと連携が取れたことが、私にとっては大きな財産となりました。

長岡市立中央図書館は、中越地震発生時に、隣接する体育館の天井が壊れ危険だったために緊急的な避難所となりました。つまり、緊急的な処置として、避難所運営に図書館職員が関わったのです。小千谷市立図書館も、同様に避難所運営に関わった職員の方が資料を捨てずに保管したために、避難所資料が多く残される結果となりました。それら資料を活用



おらたる 2階展示「仮設住宅再現」

する意味で、長岡、小千谷の市立図書館と組んで連携企画展を行ったのは、その後の中越メモリアル回廊へつながる布石となったと考えています。中越大震災という歴史上の事実を残していくという意味では、私の目標であった「歴史に関わる仕事」に就くことができたと考えますし、今後これら資料から得ることができる「教訓」や「知見」を他の被災地や、次世代へと繋いで行かなければ残す意味が半減してしまいます。物言わない資料に代わって、語り継いでいく担い手を育てることも必要となります。 「震災の記憶を残す」、私が与えられた任務はどうかやまだ道半ばのようです。

【新潟県中学校長会研究協議会妙高大会に参加しました！】

10月18日に妙高市にて行われた新潟県中学校長会に、地域防災力センターから数名がファシリテーターとして参加しました。防災教育をテーマにしたグループワークでは、活発に議論をいただき、自校での取り組みについて決意表明もしていただきました。地域防災力センターでは、学校での防災教育支援に、今後もますますのご協力をさせていただきたいと考えています。お気軽にご相談ください。



【中越大地震9周年復興祈念シンポジウムが行われました！】



10月23日(水)に中越大地震復興祈念シンポジウムとして「防災グリーンツーリズム」をテーマとしたパネルディスカッションが小千谷市にて開催され、県内各地から130名を超える方々が来場されました。泉田知事や杉並区長など4人のパネリストが登壇し、都市からみた「防災グリーンツーリズム」への期待や、広域避難者を受け入れられる新潟の可能性と今後の課題について討議していただきました。

「コラム・視点防災」

【キッチンカーで防災】

10月23日、新潟県中越大地震から9周年を迎えました。震源地となった長岡市川口地域では、恒例となった「川口秋祭り」や、震災復興イベント「SONG OF THE EARTH」が川口運動公園で開催された他、被災当時全国から寄せられた支援に対し感謝の気持ちをメッセージした黄色いフラッグキャンペーン(おかげ様感謝デー)が街を彩りました。これらのイベントは震災をきっかけに拡がっていき、今では住民とボランティアスタッフが一体となって復興を目指し、川口がさらなる発展を遂げていることを象徴するイベントとなっています。今年、地域の活動や被災地への支援等、様々な場面で活躍が期待される移動広報車「川口さんだーばーど」がくらしサポート越後川口によって整備され、秋祭り会場でお披露目となりました。自己完結型キッチンの機能を備えた車内では、簡易な調理やカフェの出張販売を行うことができ、イベントや被災地支援等への利用を計画しています。川口の復興のシンボルカラーとなった黄色の「さんだーばーど」は、被災地の力になる為、これから羽ばたいていきます。

(川口きずな館・NPO法人くらしサポート越後川口 渡辺 千明)

会員募集中!

当機構では、地域防災への取組みや被災地への支援活動に賛同し、応援いただける会員を募集しています。
 正会員：年会費5,000円/年
 団体賛助会員：100,000円/年
 個人賛助会費：3,000円/年
 ※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター
きおくみらい

【住所】
〒940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6
フェニックス大手イースト 2階
【開館時間】
【入館無料】 10:00～18:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム
そなえ館

【住所】
〒947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2
小千谷市民学習センター「楽集館」2階
【開館時間】
【入館無料】 9:00～17:00
【休館日】
毎週水曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-7480
【FAX】
0258-89-7485
【e-mail】
sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】
〒949-7503
新潟県長岡市川口中山 144-1
川口運動公園内
【開館時間】
【入館無料】 10:00～17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-3620
【FAX】
0258-89-3621
【e-mail】
kawaguchi-info@cosss.jp

やまこし復興交流館
おらたる

住所
〒940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢甲 2835
やまこし復興交流館(旧山古志会館)
【開館時間】
【入館無料】 9:00～17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-41-1203

ながおか市民防災センター

【住所】
〒940-0082
新潟県長岡市千歳 1-3-85
ながおか市民防災センター 2階
【開館時間】
【入館無料】 9:00～18:00
【休館日】
年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
info@c-bosai-anzen-kikou.jp